hotpot あなたと社会をつなぐ扉を開く
日本古来の疫病とのつきあい方と、
これからの with 新型コロナ時代のヒント。
VOL.72
2020年

はやり病×SOCIAL!

伝統の模様に込められた祈り

着物の柄などで目にする花菱文様。実はこれ、厄除けの意味があるんです。古くは中国から伝わった花模様に由来し、昔は高貴な人々しか身に着けることのできない文様でした。

一方、庶民の厄除けと言えば、麻の葉模様。生命力が強く浄化の力があるとされる麻にあやかり、子どもがまっすぐ元気に育つことを願って、産着に施されることもありました。

何気なく日常に溶け込んでいる模様に込められた意味。現代のように医学が発達していなかった時代、災厄を避け、大切な人を守り、健やかな日々を送れるようにという人々の祈りが、文化となって受け継がれています。

「はやり病」のインパクト

「はやり病」に関する日本最古の記録は奈良時代。当時、朝廷から盛んに送られた遣唐使や遣新羅使たちが、大陸から最先端の文化や制度、シルクロードで結ばれたインドやペルシアからの文物を持ち帰り、国際色豊かな天平文化が花開きました。その一方、彼らは「天然痘」をもこの国にもたらしました。

以来、天然痘は国全体で周期的に大流行を繰り返し、中でも737年（天平9年）の大流行では、壮絶な政権争いの末に権力を握った藤原四兄弟全員が病死。有力貴族の多くも死に絶え、政（まつりごと）は一時停止。朝廷は大混乱に陥りました。この時の流行では、人口の約3割にあたる、100万人～150万人が死亡したと伝えられています。

古代より災害や疫病の流行は「神の怒りによるもの」と考えられ、怒りの原因を特定するために、神意を聞くことができる巫女が重要な役割を果たした時代もありました。律令国家としての形が整った奈良時代では、「指導力やモラルが低い国家リーダーが悪政を行うこと」が神の怒りの原因とされるようになります。醜い権力争い、天然痘の流行、飢饉や地震なども相次ぎ、これで社会不安が広まらないわけがありません。「鎮護国家（仏教によって国を護る）」を推し進めていた聖武天皇が、このような状況を一掃しようと各地に国分寺を造らせ、東大寺の大仏を造立させたのは有名な話です。しかし、混乱した時代に大仏を造立させただけでなく、5年間で4回も遷都を繰り返したことで民の負担は増大。国家財政は破綻寸前、人心は朝廷から離れ、政権争いも再び激化していくことに。そして大仏の開眼供養会からわずか32年で、平城京は終焉を迎えることとなるのです。

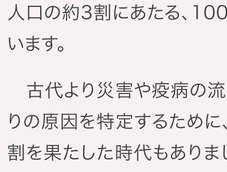
いにしえ人とはやり病

人が農耕と牧畜を始めるようになってから、感染症のリスクは高まったと言われています。特に人から人へうつる疫病（はやり病）は、紀元前より現代まで、「人口が密集する都市」を中心に何度も大きな危機をもたらしました。しかし、細菌やウイルスが感染症の原因だと発見されたのは19世紀末以降のこと。治療法が確立していなかった時代、人々は「はやり病」とどのように関わってきたのでしょうか。

「はやり病」と遷都

「雅で美しい」というイメージの平安時代。しかし元をたどれば平安京も、厄災を怨霊の祟りと見なす「御霊信仰」から始まりました。怨霊とされたのは国家に対する大罪を犯したとされ、冤罪を晴らせないまま京都以外の地で亡くなった高貴な人物です。政権争いの中で、一方の策略に加担したり、保身のために虚偽の証言をした貴族たちも少なくなかったのでしょう。いにしえより続く「災害＝神の怒り」の公式と、解明できない天変地異や疫病の流行に説明をつけずにはいられない人の心理。そこに疫（やま）しさやうしろめたさが加わり、「怨霊」という存在を生み出したのだと解釈されています。特に平安京遷都後のはやり病は、非業の死を遂げた早良親王の祟りではないかと恐れられました。

早良親王が亡くなったのは、785年。その前年に行われた長岡京遷都にあたり皇位継承争いに巻き込まれ、謀反の罪で幽閉されるも、断食をして無実を訴え続けたと言われます。しかし訴えも虚しく、淡路に配流となる途中で絶命。その後、兄である桓武天皇の周りで怪異が起こるように・・・。妃・皇后・母が立て続けに亡くなり、ショックからか皇子の耳も聞こえなくなりました。当時の都である長岡京では洪水と日照り続きで飢饉となり、再び天然痘が流行。都中に死者が溢れました。こうして桓武天皇は長岡京を捨て、794年に平安京へと都を移します。



「はやり病」と文化

平安京では東西南北に四神を配するなどして守りを固めたものの厄災は止まず、とうとう富士山まで噴火。恐れおののいた桓武天皇は早良親王の御霊に崇道天皇という尊号を贈って御霊神社に祀り、彼岸会（ひがんえ）をとり行いました。以来、春分の日には天皇が歴代の天皇の御霊を祭られる儀式が行われ、 今では「春分の日」として国民の祝日になっています。

怨霊によるとされる災害や飢饉は後を絶たず、863年、6つの怨霊を鎮めるため、神泉苑で御霊会が開かれました。全国66カ国の数に準じて66本の鉾を立て厄払いを行ったことが、後に町衆の祭りとして発展し、祇園祭となったのです。

朝廷に始まる「御霊会」に町衆は願いや祈りを付け加え、彩豊かな文化を発展させました。京都の寺社仏閣には疫病退散の祭事が数多くあります。それらは信仰であるとともに、私たちの生活の中に溶け込み、豊かな心やコミュニティを育む素となっていったのです。

京都市市民活動総合センターhotpotについて

市民活動も、ひとりたちが日常の暮らしの中で感じる「困った！を解決したい」「もっと豊かな生活したい」と願う市民が、目主的に取り組むお益的な活動のことです。

京都市市民活動総合センター（愛称しみんセンター）は、社会的課題に取り組む組織や団体を総合的に支援する NPO・市民活動団体を総合的に支援する公益財団法人京都市市民活動総合センター（愛称京都市市民活動総合センター）は、京都市内を中心に活躍サポートする組織に対してプローチをきる人がなかれば、もっと社会の問題解決につながる。そんな思いを込め、何気ない活動の中にある身近なトピックを通じて社会の課題や希望を取然を紹介していきます。

hot pot は、市内公共施設やカフェ・飲食店・美容室などを配布しています。配布先は https://shimisen-kyoto.org/shimisen-info/11825 でご確認ください。

企画・編集統括：平尾剛之　編集：田村賀美・上坂のぞみ・大内美穂
デザイン・構成：デザインオフィス（@shini）　協力：京都安藤ガイド京都ツアーガイド協会　谷井 潤・山田 久男
編集責任者：京都市市民活動総合センター（指定非営利活動法人）きょうと NPO センター）
発行：京都市市民活動総合センター　発行部数：10,000 部　発行日：2020 年 9 月

hotpotについて

あなたの悩みを相談する場を提供するとともに、市民活動を支える人材の育成や、市民活動を支援する仕組みを引き出しています。

〒600-8127　京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湯町 83-1（河原町五条下る東側）
「ひと・まち交流館 京都」2 階
☎ 075-354-8721　FAX 075-354-8723
http://shimin.hitomachi-kyoto.jp/
shimisen@hitomachi-kyoto.jp

About Kyoto Center For Supporting Social Change And hotpot

hotpotは、順次いきセンを紹介しています。

今号は、東山いきいき市民活動センターをご紹介！

東山いきいき市民活動センター

◀東山いきいき市民活動センターの外観

京都市東山区三条京阪駅
東入2丁目下る巽町
442-9
075-541-5151 FAX 075-531-4971
http://higashiyamacds.main.jp

東山いきいき市民活動センターは、三条京阪駅と東山駅のちょうど中間に位置しています。交通の便もよく、また多彩な用途で使用可能な部屋が揃っても、多様な世代の方々に様々な用途で利用いただいています。

「コミュニケーション・デザイン・ラボラトリ」をセンターのコンセプトに掲げ、多様な人々が出会い、気づきあい、繋がり、行動しあうための対話の場の創出を目指して事業を実施しています。

その一環として、「みんなの学校ごっこ」という事業では、まちの市民が先生となり、自身が持っている特技や趣味、職業スキルなどを生かして様々な授業を行うことができる学びの場を創出してきました。

また、市民活動の情報発信の担い手づくりにも力を入れており、地域や社会にとって良いことを見つけ、動画で発信している人（Social Good）や、動画発信チーム「Social Echoes」を組織しています。

何か活動を始めてみたいＩ多様な分野に触れてみたいＩ社会に良いことを発信してみたいＩ＋とんな方は ぜひ一度センターに遊びに来てみませんか？！

岡本佳也センター長

アクセス

市バス 4・17・205 系統「河原町正面」下車すぐ
京阪電車「清水五条」駅 1 番出口より徒歩 8 分
地下鉄烏丸線「五条」駅 5 番出口より徒歩 10 分

☒ 毎月第 3 火曜日は休館

◎ 月曜日～土曜日　9：00 ～ 21：30
◎ 日曜日・祝日　9：00 ～ 17：00

はやり病つたえ話

水信仰は庶民の知恵！？

祇園祭と言えば「山鉾」のイメージですが、これは町衆の文化。神事としての最重要部分は神輿の渡御（とぎょ）、つまり八坂神社から御旅所へ神が移動することです。この御旅所のひとつに「少将井（しょうしょうのい）」とよばれる井戸がありました。実は平安後期以降、京都で発生した疫病の際には、ある特定の井戸水を飲むと疫病を免れるという霊泉・霊水信仰が定着していたそう。「少将井」と「祇園祭」のつながりは、水と疫病が切っても切れない関係であることを物語っています。一方で、各地に湧き出すこうした名水が、京料理や酒造、茶の湯など、文化の発展に欠かせない恩恵をもたらしていきます。

いずれにしても、疫病が流行っているときに汚染された水を飲むことは命取り。地下から湧き出した清らかな水は安全です。まだ病原菌など発見されていない時代ですが、霊水信仰にはそんな人々の知恵も含まれていたのではないでしょうか。

※御旅所とは神社の祭事の神輿渡御の際に、本宮の神様が立ち寄られる休憩所。少将井は中京区車屋町通夷川上ル辺りにありましたが、今は残っていません。

また改元どまか…

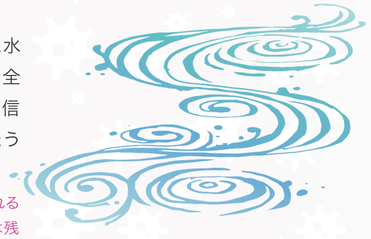
「ゆく河の流れは絶えずして…」の冒頭文で知られる『方丈記』の著者・鴨長明（1155〜1216）。彼の61年の生涯の間に、24回も元号が変わったというのをご存知でしたか？平均すると2年半に一度、改元が行われていたことに！！

当時は元号を改めることで、凶事を断ち切ることができると考えられており、国家を揺るがすような大きな災厄（はたまた吉事）があるたびに改元を行う慣わしがありました。長明が生きた平安末期は、飢饉や疫病の流行、源平合戦などまさに天変地異と戦乱の世。「末法思想」が流行り、清盛、西行法師、法然上人などなど、名だたる人物たちが活躍しました。世の中の価値観が一変し、誰もが「無常」を感じていたのですね。

あんこの「赤」が効く！

古来、赤い色は厄を除けるとされてきました。その代表的な食べ物が、あずき。あずきの持つ赤い色素は、縁起物であると同時に、魔除けの力があると考えられていました。

それではなぜ、お彼岸にお餅をたっぷりの餡子（あんこ）でくるんだ「ぼた餅（春）」や「おはぎ（秋）」を食べるのかといえば…もうお分かりですよね？もともとお彼岸が早良親王の怨霊を鎮めるための日であったことから、疫病をもたらす怨霊の厄を除けるために、供え、食されたお菓子だったのです。



1200年以上の時を経てなお、私たちの日常に根付く伝統を生み出すほどの怨霊（疫病）パワー。そのエネルギーは恐ろしくある半面、民間の知恵としての文化を創造する原動力をも担ってきたのかもしれません。

疫病には百万遍の〇〇を！？

京都は左京区、京大の学生でにぎわい、秋には古本市で有名な百万遍（ひゃくまんべん）。独特の地名ですが、「いったい何が百万遍なんだろう？」って思ったこと、ありませんでしたか？

弘化元年（1331年）、地震が元で広がった疫病（天然痘）によって多くの人が亡くなり、鴨川には死体が折り重なるほどでした。そこで時の天皇　後醍醐天皇が知恩寺に疫病平癒の祈祷を命じると、8世住職善阿空圓（ぜんあくうえん）上人が弟子らと共に念仏を唱えながら7日7晩大念珠繰りを行い、みごとに疫病を鎮めたそうです。

祈祷の際に上人が唱えた念仏の回数は、なんと百万回（百万遍）！このことを知った後醍醐天皇は知恩寺に「百万遍」の寺号を賜り、やがて知恩寺の周辺も「百万遍」と呼ばれるようになったのだとか。疫病と地名にまつわる不思議なエピソードです。

いにしえ人の「自粛」

古来より都として栄え、多くの人が行き来した京都。文化が発展する一方で、「密」な空間は疫病のときには不利に働きます。

そうした状況下に置かれたとき、平安の人々は御霊会で祈るだけでなく「門戸を閉ざす」ことで難を逃れようとしました。これにより出仕する公卿が不在になり、やがて京の街路を往来する者が消えた、との記録が残っているとか。

こうした行為は怨霊や疫病神を避けるためであったと考えられますが、人気（ひとけ）が途絶えた街のイメージは今日の「自粛」にも重なり、「科学的根拠」が重要視される現代から見ても、不思議と理にかなっているのです。

厄除けお風呂ブーム

端午の節句には菖蒲湯に入る人も多いでしょうが、その由来をご存知ですか？
そもそも、菖蒲湯に使われる菖蒲は、紫色の花をつける花菖蒲ではありません。ガマの穂に似た花をつける、サトイモ科に属する植物です。

菖蒲は、その香りの強さや葉の形が剣に似ていることから、疫病や邪気を払うと信じられてきました。奈良時代以降、宮中行事となった端午節会（たんごのせちえ）では、無病息
災と長寿を祈って、菖蒲などを献上し下賜（かし）する儀式が行われました。

菖蒲湯については、室町時代にはすでに文献に登場しており、端午の節句が民間の行事として盛んになった江戸時代には、長屋暮らしの庶民も湯屋で楽しんでいたそう。疫病に罹らないように。健康であり続けるように。昔も今も変わらぬ人々の願いが、風習となって受け継がれています。

暑い中活動される様子

withコロナ時代 京都の新しい動き

いわくら農園倶楽部は、コロナ禍のなかでのフレイル対策※として、人々の交流の場を無くさないために始まった農園プロジェクトです。荒地だった場所を耕すところから始まったこの取り組み。現在は毎週土曜日に畑に集まり、おじいちゃんおばあちゃんの知恵を借りて、みんなが自分のペースで楽しみながら農作業をしています。

この活動では、農園が地域のさまざまな人たちの交流拠点となることで、認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを目指しています。実際に畑では、子ども、お年寄り、障害のある人、介護・医療従事者や地域の人といった、多種多様な人たちが自ら進んで集まり、みんなで和気あいあいと、誰もが主体的に畑仕事をしていました。

活動に参加されているSさん親子

畑で収穫された野菜は、子ども食堂「京都Tera.Coya」でお弁当などに使われている他、児童館ではお迎えのママさんたちに向けてプチ・マルシェとして安価での販売もしています。特にマルシェでは、認知症当事者の方が店員として活躍されているそうです。

秋には児童館の子どもたちと一緒に芋掘りや焼き芋、春には出張でできるいちご狩りも企画されているそう。コロナ禍や認知症、障がい「だからできない」ではなく、この状況・この人「だからこそできる」ことを楽しむ。そんな素敵な取り組みです。

※フレイルは年齢を重ねるとともに心と体の活力が衰えた状態を指し、これの対策をとることで要介護状態に進まずにすむ可能性があるといわれています。

コロナの先の未来へ　寄稿　枝廣淳子さん

新型コロナウイルス感染拡大が続く2020年3月、私が配信している環境メールニュースで、新型コロナウイルスに負けないために大事だと思うことを5つ、みなさんにお伝えしました。

特に**(5)Stay Focused（大事なことは考え続けよう）**では、新型コロナで不安な状況の中であっても、「本当に大切なものは何なのか？」「新型コロナの危機が去ったあと、どういう社会や地域になっていってほしいか」を考え続けましょう、と呼びかけました。同時に新型コロナ感染拡大の状況の中でも、コロナに負けず、困っている人たちを助けたり、お互いを支え合う新しい取り組みを目にすることが増えてきました。

そこで、「こんな社会・世界にしたい」と思う新しい国内外の状況や活動を、みなさんにも知ってもらいたいと思い、「新型コロナウイルスに負けないために国内外の素敵な取り組みを知ろう！〜その先の持続可能で幸せな社会にむけて〜」（https://www.es-inc.jp/corona/）というWebサイトを立ち上げました。

Webサイトでは、新型コロナの影響で自粛を余儀なくされた地元の飲食店や、学校給食や飲食店に納品する予定がなくなり、販売先を失って困っている地元の農家を支援する取り組みが様々な地域で進められている事例などを紹介しています。ほかにも休校中の子どもたちにお弁当を配布することで親を支援する活動など、コミュニティの中でお互いに支え合う動きが新型コロナをきっかけに増えていることがわかります。ソーシャル・ディスタンスを取りつつ新しいつながり方をつくるコミュニティは、コロナの先の社会でも貴重な存在です。

新型コロナウイルスに負けないために
国内外の素敵な取り組みを知ろう！
〜その先の持続可能で幸せな社会にむけて〜

https://www.es-inc.jp/corona

今回のコロナ感染は、「そろそろ引き返し、戻るべき方向」「本当に大事にすべきことを大事にする方向」へ社会を大きく動かしました。同時に、世界的なコロナのまん延や経済、産業面の打撃が広がることで、私たちの世界がいかに緊密に結びついているのかも実感しました。グローバル化のメリットだけでなく、デメリットやリスク、脆弱性も考慮して、グローバル化をどこまでとし、どこまでローカルにとどめておくべきなのかを考えておかなければならないと思います。

私は数年前から静岡県熱海市に住んでいます。山も海もある自然豊かなこの地域で、「未来の子供たちに、きれいで楽しい地球を残す」をテーマに2020年4月から活動を始めています。この活動の第一弾としてスタートしたのは、熱海の海の幸を直接消費者に届ける「おいしいコロナ支援」プロジェクトでした。新型コロナ感染拡大で、熱海のホテルや旅館、飲食店が休業となり、海産物や干物を供給していた魚市場や水産会社も、販売先を失い大変な状況でした。一方、特に都市部の消費者は買い物に出ることが難しく、新鮮でおいしい食べ物が手に入りにくいと聞きました。そこで、地元の水産業とコラボして、生産者と消費者をつなぐプラットフォームを作ったところ、大きな反響をいただき、購入者から「おいしい海の幸をありがとう」「お互いにがんばりましょう！」「コロナが終息したら熱海に遊びにいきます」といったフィードバックが寄せられました。元気なまちづくりのお手伝いができて、大変うれしく思っています。

また2020年7月から、熱海で海洋プラスチック問題に取り組むプロジェクトも開始しました。このプロジェクトは、川から流れるプラスチックごみを河口でキャッチするユニークな取り組みです。2050年までに「海の中のプラごみの重量」が、「海の中のすべての魚の総重量」より大きくなると言われている海洋プラスチック問題は、コロナウイルスの期間は「休戦」というわけではありません。逆に、コロナウイルスのために、状況がさらに悪化していく問題もあります。最初にお伝えした、「新型コロナウイルスに負けないために大事だと思うこと」の5つのうちのひとつ、**Stay Focused（大事なことは考え続けよう）**を実践するために、まずは地元で、自分たちでできることから始めています。コロナのトンネルの先にどんな世界や社会を描いておくかが、「コロナ後」の私たちを方向づけます。これからもみなさんとよりよい未来を作っていきたいと思います。

この人に聞いた！

枝廣淳子

大学院大学至善館教授・幸せ経済社会研究所所長・環境ジャーナリスト

持続可能な未来に向け、地球環境の現状や国内外の動き、新しい経済や社会のあり方、幸福度を高める考え方や事例を研究、発信している。「伝えること」で変化を創り、「つながり」と「対話」でしなやかに強く、幸せな未来の共創をめざす。また、意志ある未来を描く地域や企業において合意形成の場づくりやファシリテーターを務めている。著訳書に『不都合な真実』、『成長の限界　人類の選択』、『カウントダウン―世界の水が消える時代へ』、『レジリエンスとは何か』、『地元経済を創りなおす』、『プラスチック汚染とは何か』ほか多数。京都府出身。